

ISIL(イスラム国)に拘束された二人の日本人が殺害されたという報道は残念ながら確かなことであろう。深い怒りを覚える。彼らは「神の名」を口にするが、神ではなく、自分たちの野望を言い表しているだけである。その野望は人間に対する愛や尊敬はみじんもない。狂気の暴力でねじ伏せようとしている。自己中心で誰からも賛同を得ることはできない。虚無性は限りなく深い。

安倍首相は、二人の殺害報道を受けて「残虐非道なテロリストを絶対に許さない。罪を償わせるため、国際社会と連携していく」と語った。「償う」という言葉を『広辞苑』では「うめあわせる、賠償する」と説明している。「罪や過ちに対し埋め合わせ、賠償する」という意味である。安倍首相の発言は二人を殺害した残虐行為に対し、埋め合わせをさせる、賠償させると取れる。言い換えれば「報復する」という宣言に聞こえる。どんな報復をすると言うのであろうか。憲法9条を持つ日本は武力による報復はあり得ないが、力による解決を求めるような猛々しい響きを持って、世界にも発信している。

殺害された後藤健二さんの母親の石堂順子さんは殺害映像が流された後「この悲しみが憎悪の連鎖となっではいけない」というメッセージを読み上げた。どんなに深い悲しみをお持ちであろうかと想像するが、それを乗り越えて、平和を求める切なる声である。紛争地に行って悲惨な現状を報告し、共生を訴え続けた息子さんの遺志を継ごうとする篤い思いが痛いように伝わってくる。人は、このような高貴な精神を持ち得るのである。

9・11の「同時多発テロ」が起こった時、百組くらいの遺族たちが「平和な明日を求める9・11家族会(略称Peaceful Tomorrows)」を立ち上げた。家族会の創始者の一人であるデイヴィッド・ポトーティ氏が来日して、講演会が持たれた。ポトーティ氏は長兄を世界貿易センターで失った。家族の大きな悲しみの中で、母親は「こんな悲しみを他の人に味あわせたくない」と叫んだと言う。ポトーティ氏は「あらゆるテロ行為の背後には不満がある。それゆえにその根底にある諸要素を検討することなくしては、我々はテロリズムに有効に対決することはできない」と語った。更に、被害者は怒りから報復へと駆り立てられるが、その思いを断ち切り、悲しみを共有していくところに和解が生み出されていくと言われたことに感動した。しかし現実には、家族会の主張は受け入れられず、米国を中心に同調する諸国は報復の激しい軍事攻撃に走った。そのため、アフガニスタンもイラクも収拾がつかない混乱を招き、「イスラム過激派集団」を増殖し、今日に至っている。

ポトーティ氏を招いた講演会後のリレートークで、タレントの中山千夏氏は興味深い話をした。親しい友が次々と体制に組み込まれている現状から、三つのスローガンを言い聞かせている。① 国家より個人 ② 正義があっても人を殺さない ③ 儲かることは悪いことであると言う。特に③が面白く、的を射ているのではないか。

日本は曲がり角に立っている。安倍首相が言わんとする力による「報復」に走る道か、石堂さんやポトーティ氏が言う「憎悪の連鎖」を断ち切る和解を模索する道か。憲法9条は武器を放棄し、交戦権を認めないと謳っている。この憲法の下、平和のブランドを培ってきた日本は非戦のメッセージを世界に発信する使命を発揮する時ではないか。権力者の猛々しい言葉によって、歴史に大きな悲慘をもたらした幾多の事例がある。歴史から学ぶ英知を欠いた安倍首相の言葉に追随してはならない。また、権力に巻き込まれたジャーナリズムに踊らされてはならない。